

# 新井中央小だより

ホームページ <http://azalea.ac.city.myoko.niigata.jp/araich-s/otayori/index.html>

No. 266

メールアドレス [chuou@ac.city.myoko.niigata.jp](mailto:chuou@ac.city.myoko.niigata.jp)

2021（令和3）年11月26日

## そういうわたしはいつもセトモノ

先日、家の片付けをしていたところ、「つまづいたって いいじゃないか にんげんだもの」等の作品が毎日楽しめる相田みつをさんの日めくり暦が出てきました。

書の詩人、いのちの詩人とも称された相田みつをさんの作品は、独特な書体と平易な言葉で、30年ほど前に爆発的な大ブームとなり、その作品は現在も広く愛されています。正直な所、ブーム当時、私は若かったせいか（年のせいにははいけませんね。感受性の問題でしょうか。）、その分かりやすさや、ブームになっていること自体に何か抵抗感があって、素直に作品に向き合えなかった気がします。

そんな相田みつをさんの作品の中で、私が妙に惹かれる作品がありました。右の「セトモノ」の詩です。（相田みつをさんの作品は、その書も堪能すべきなので、この字体では物足りないというか興ざめ、という方もおられると思います。是非、作品集等でお楽しみください。）

本稿の表題にした「そういうわたしはいつもセトモノ」この最後の一節に私は深く共感してしまうのです。

相田みつをさんのご子息によれば、この作品は初期に作られたものから変更され、最後の一節が後で付け加えられたのだそうです。「諭す言葉」で終始していない所がこの作品の最大の魅力だと、私は感じています。

当校6年生のおかげで、ここ2ヶ月くらいの間に柿崎小学校教諭の林誠仁さんや、お笑い集団NAMARAの高橋なんぐさん、徳島県人権エンタメ集団「友輝」リーダー中倉茂樹さんを始め、たくさんの方のお話を立て続けに聞くことができました。人権教育やSDGs等、それぞれ切り口は違いますが、いずれも深い感銘を受けました。

子どもたちも、時に笑い、時に真剣に話を食い入るように聞いていました。その中で、私は共通点のようなものを感じました。それは「共感させてくれる力」です。上から目線の説諭だけではなく、相手（子ども）の目線まで降りてきて、真剣に向き合い、自らの失敗や弱さを飾らずに語り、そして「みんなの幸せ」に向け、前向きで肯定的な未来への希望を示してくれるのです。共感できる関係性をベースに、親身になって前に進むエネルギーを与えてくれる、そんなイメージです。

新型ウィルス感染症の影響もあり、全国的に自死を選んでしまう若者が増えたと聞きます。県内中学生の痛ましいニュースもありました。その悲劇を、中央小の子やその家族、関係者から決して出してはいけません。見守り、話を聞き、適切に自己開示しながら共感できる関係性を築き、明日への意欲、将来の幸せに向けた活力を語る、そんな仲間や大人でありたい。私たち大人1人1人が、ゲートキーパー（命の門番）であり、明るい未来への案内人でありたい、心からそう思います。

最後に先日99歳で逝去された瀬戸内寂聴さんの言葉を紹介します。「死のうと思ひ詰めなくたって死ぬときにはあっけなく死ぬのが人間です。慌てて自殺しようとするなんてもってのほかです。」（瀬戸内寂聴 日めくり暦2012年版より）

校長 村治 隆夫

※各学級で指導を行い、県リーフレット「学校、家庭、地域が連携して子どもを見守りましょう！」を配付しました。是非、ご家族でじっくりお読みいただきますようお願いいたします。

セトモノとセトモノと  
ぶつかりつくとすべつとわれちゃう  
どっちかやわらかければだいじょうぶ  
やわらかいところをもちましよう  
そういうわたしはいつもセトモノ  
みつを